

フォーラム

日本におけるファシリテーターの未来像

——音楽のチカラ、ファシリテーターのチカラ——

実施レポート

2012 年 8 月 27 日

上野学園 石橋メモリアルホール

上野学園大学音楽文化研究センター

◎ 目 次

I. 実施概要	1
II. 登壇者略歴	2
III. 実施記録	3
1. 開会・来賓挨拶	3
2. 基調講演Ⅰ 日本におけるファシリテーターの未来像——自分の考えを活かす勇気を持つこと マイケル・スペンサー	3
3. 基調講演Ⅱ 音楽家と社会の関わり方——“私弾く人、あなた聴く人”以外の、可能性 仲道郁代	6
4. パネルディスカッション「日本におけるファシリテーターの未来像」	9
5. マイケル・スペンサーによるワークショップ	15
6. グループワーク「ファシリテーターの可能性、その先にあるもの——芸術と社会の関わり方」	17
IV. グループワークにおける意見集約と考察 ～まとめに代えて～	19

I. 実施概要

催 事 名 フォーラム

「日本におけるファシリテーターの未来像——音楽のチカラ、ファシリテーターのチカラ——」

目 的 上野学園 石橋メモリアルホールは、2009 年よりマイケル・スペンサー（ファシリテーター／上野学園大学音楽文化研究センター客員研究員）を迎え、欧州で一般的な創造型音楽ワークショップの推進に不可欠な「ファシリテーター」を養成する講座を開催して参りました。

「ファシリテーター」は、音楽・人・社会・時代をつなぐ重要な役割を担っているにも関わらず、日本では、その重要性があまり認識されていません。そこで、本フォーラムでは「ファシリテーター」の役割とその重要性、そして未来像を探ることを目指します。

日 時 2012 年 8 月 27 日（月）10:00～19:00

会 場 上野学園 石橋メモリアルホール／食堂／ラウンジ

参加者数 65 名（申込数 76 名）

招待者数 27 名（申込数 40 名）

進行および内容

時間	内容	登壇者	所属・肩書き
10:00	開会	石橋 慶晴	学校法人 上野学園理事長
	来賓挨拶	近藤 誠一	文化庁 長官
10:15	基調講演Ⅰ	マイケル・スペンサー	ファシリテーター／上野学園大学音楽文化研究センター客員研究員 ／元ロンドン交響楽団ヴァイオリン奏者／元英国王立歌劇場教育部長
11:10	基調講演Ⅱ	仲道 郁代	ピアニスト
12:00	パネルディスカッション「日本におけるファシリテーターの未来像」		
	パネリスト	伊波 睦 田村 孝子 吉野さつき 吉本 光宏	日本フィルハーモニー交響楽団トロンボーン奏者 文化ジャーナリスト／静岡県コンベンションアーツセンター グランシップ館長 ワークショップ・コーディネーター／愛知大学准教授 ニッセイ基礎研究所主席研究員・芸術文化プロジェクト室長
	モデレーター	箕口 一美	サントリーホール プログラミング・ディレクター
13:00	休憩		
14:15	マイケル・スペンサーによるワークショップ		
15:00	グループワーク「ファシリテーターの可能性、その先にあるもの——芸術と社会の関わり方」		
17:30	交流会		
19:00	終了		

主 催 上野学園 石橋メモリアルホール、上野学園大学音楽文化研究センター

特別協力 有限会社オフィス・ナカミチ、株式会社ジャパン・アーツ、株式会社ニッセイ基礎研究所

後 援 公益社団法人企業メセナ協議会、国際交流基金、公益財団法人ジェスク音楽文化振興会、台東区、台東区教育委員会、東京都、社団法人日本オーケストラ連盟、社団法人日本クラシック音楽事業協会、ブリティッシュ・カウンシル、文化庁芸術家在外研修員の会

Ⅱ．登壇者略歴

マイケル・スペンサー | エducator / ファシリテーター / ヴァイオリニスト

元ロンドン交響楽団ヴァイオリン奏者、初代英国ロイヤル・オペラ・ハウス教育部長。現在、Sound Strategies 経営責任者。スペインで唯一自主運営をしているバレス交響楽団(バルセロナ)にて、教育プログラムと経営方針の特別顧問を務める。世界各地で芸術教育プログラムを開発・実践、芸術団体や企業から高い評価を受ける。多分野との共同プロジェクトも多数手掛けている。日本でも社団法人日本オーケストラ連盟・文化庁後援により、24 のプロオーケストラと各地で教育プログラムを実施。2006 年皇后陛下ご臨席のもと、紀尾井ホールにてワークショップ型コンサート開催。08 年には、教育ディレクターを務めた『ピーターと狼』がアカデミー賞(短編アニメ部門)を受賞した。上野学園大学音楽研究文化センター客員研究員。

仲道 郁代 | ピアニスト

4 歳からピアノをはじめ、桐朋学園大学 1 年在学中に第 51 回日本音楽コンクール第 1 位を受賞。国内外での受賞を経て 1987 年ヨーロッパと日本で本格的にデビュー。温かい音色と叙情性、卓越した音楽性が高く評価され、人気、実力ともに日本を代表するピアニストとして注目を集めている。レコーディングはソニー・ミュージックジャパンインターナショナルと専属契約を結び、多数の CD をリリース。テレビ番組、新聞、雑誌、ラジオなどメディアへの出演も多く、音楽の素晴らしさを広く、深く伝える姿勢は多くの共感を得ている。2003 年からは、大阪音楽大学特任教授、財団法人地域創造理事、12 年からは、桐朋学園大学教授としても、積極的に活動している。オフィシャル・ホームページ <http://www.ikuyo-nakamichi.com>

伊波 睦 | 日本フィルハーモニー交響楽団 トロンボーン奏者

兵庫県尼崎市出身。武蔵野音楽大学卒業。トロンボーンを木下利男、関根五郎の各氏に師事。1981 年 8 月に日本フィルハーモニー交響楽団入団。日本フィル・プラスアンサンブルのまとめ役のほか、親子コンサートの草分け「日本フィル夏休みコンサート」のプロジェクトメンバーを務める。ワークショップのチーフ・ファシリテーターとして、2002 年に渡英、音楽創造ワークショップの手法を学ぶ。2000 年より毎年マイケル・スペンサー氏のアシスタントとしてワークショップに参加、日本フィルのエデュケーション・プログラムの開発・実施の中心音楽家でもある。

田村 孝子 | 文化ジャーナリスト / 静岡県コンベンションアーツセンター グランシップ館長

東京都出身。1965 年慶応義塾大学文学部卒業。同年 NHK 入局。副会長秘書を経て、68 年から音楽番組ディレクターとして「あなたのメロディー」「N響アワー」「ときめき夢サウンド」「ジュリー・アンドリュース&アンドレ・プレヴィン指揮 NHK 交響楽団コンサート」などの人気音楽番組を手掛ける。97 年～2007 年まで NHK 解説委員(芸術文化担当)として文化行政への提言や情報発信に努めるとともに、06 年～11 年文化庁・文化審議会委員。現在、静岡県コンベンションアーツセンター グランシップ館長。

箕口 一美 | サントリーホール プログラミング・ディレクター

83 年国際基督教大学卒業。コンピューター関係の翻訳業などを経て、87 年カザルスホール企画室・アウフタクトに参加、2000 年まで同ホールプロデューサー。全国各地のホール担当者との交流や意見交換から、クラシック音楽の普及プログラムに関心を持ち、アメリカの普及プログラムを研究。98 年より財団法人地域創造

主催「公共ホール音楽活性化事業」コーディネーター。NPOトリトン・アーツ・ネットワークディレクター。08年8月よりサントリーホール企画制作部勤務。06～09年東京藝術大学大学院芸術環境創造分野講師として、演奏家のキャリア・マネージメントを研究。訳書に、A・M・ビーチング著『Beyond Talent 音楽家を成功に導く12章』（水曜社刊）がある。現在、サントリーホール プログラミング・ディレクター。

吉野さつき | ワークショップ・コーディネーター／愛知大学准教授

シティ大学大学院（英国）芸術政策経営学部修士課程修了。公共ホール文化事業の企画運営に携わり、平田オリザによる演劇ワークショップや、野村萬斎と英国ナショナルシアターのワークショップリーダーによる共同ワークショップなどを手がける。平成13年度文化庁派遣芸術家在外研修員として、英国で演劇のアウトリーチやエデュケーション・プログラムの研修と調査を実施。帰国後、教育、福祉、ビジネスなど幅広い現場でのアーティストによるワークショップ をコーディネートし、大学や公共劇場などでの人材育成事業にも数多く携わっている。2010年より特定非営利活動法人ワークショップデザイナー推進機構の理事長も務める。

吉本 光宏 | 株式会社ニッセイ基礎研究所 主席研究員・芸術文化プロジェクト室長

1958年徳島県出身。早稲田大学大学院修了（都市計画）後、社会工學研究所などを経て89年から現職。文化施設開発やアート計画などのコンサルタントとして活躍する他、文化政策、文化施設運営・評価、創造都市等の調査研究に取り組む。98年から（財）地域創造のアウトリーチ事業のコーディネーターを務め、アウトリーチや芸術と教育に関する調査研究、論文も多い。文化審議会、東京藝術文化評議会、創造都市横浜推進委員会等の委員、社団法人企業メセナ協議会理事、東京大学／東京藝術大学非常勤講師などを歴任。主著に、『再考、文化政策（ニッセイ基礎研究所報）』など。



写真左:石橋慶晴氏、中央:近藤誠一氏、右:マイケル・スペンサー氏

Ⅲ. 実施記録

1. 開会・来賓挨拶

フォーラムの開会にあたって、石橋慶晴氏(学校法人上野学園 理事長)より開会の挨拶があった。石橋理事長から、2009 年より上野学園大学音楽文化研究センター客員研究員としてマイケル・スペンサー氏を迎えて「ファシリテーター養成講座」を開催してきたこと、本フォーラムを通じてファシリテーターの役割と重要性、未来像を探ることを目指しているとの挨拶があった。

続いて、近藤誠一氏(文化庁長官)より、来賓の挨拶があった。近藤長官は、芸術文化を社会の力のため、人間の生きる力のために効果的に活用するかを問い続けてきたこと、固定観念や既成概念を乗り越える芸術文化の力は、現在の日本や世界の課題を解決するために、大きな力になるだろうとの見方を示された。その意味で、近藤長官は本フォーラムの開催意義を高く評価された。

2. 基調講演 I

日本におけるファシリテーターの未来像
——自分の考えを活かす勇気を持つこと
マイケル・スペンサー(ファシリテーター／上野学園大学
音楽文化研究センター客員研究員)

マイケル・スペンサー氏による基調講演は、参加者に「ファシリテーターとは何か」という問いの答えを紙に書き留める作業から始まった。参加者各自は、このフォーラムの最後のグループワークで、自分のファシリテーター像が変化したかどうかを確認することになる。次に、本フォーラムの構想の契機となった仲道郁代氏とスペンサー氏の出演によるドキュメンタリー番組でのエピソードを経て、講演の本題に入った。

異なる文化的背景への理解

「ワークショップは、それ自体として存在しているものではなく、必ずワークショップの中心に主導権を持って進行していく人物がいます。その人物こそがファシリテーターとなるべきなのです」

スペンサー氏によると、英国では 30 年ほど前(1980 年代)から劇場や劇団が芸術教育の概念が広まったものだが、その哲学的な原理は欧州の 18 世紀の啓蒙時代に遡ると言う。1748 年に哲学者のイマニュエル・カントが「自分の考えを活かす勇気を持つこと」(著書:啓蒙とは何か・An answer to the Question: 'What is Enlightenment?' より)という言葉を残したように、18 世紀の欧州では一人ひとりの個人の意思の表明や権利が、教会、王侯



写真:マイケル・スペンサー氏によるプレゼンテーション

貴族に変わり台頭し始めた。それから文化や科学は飛躍的に発達し、創造や発明に新しいアプローチが次々と生まれたのである。

その一方、当時、日本は江戸時代にあった。礼節や敬意を重んじる儒教は、individual＝個人を追い求める欧州とは大きく異なり、周囲と同じ考え方を持つことが集合体の安定することにつながると思われてきた。そのような中で、日本の文化は繰り返し研鑽して高度な技を磨くことに価値が置かれる傾向があった。

現在、日本の音楽教育の学習指導要領では、「鑑賞力」と「創造力」に触れられてはいるが、実態としては、歌唱や楽器演奏などの「技術力」の育成に力点が置かれているとスペンサー氏は言う。

西洋芸術に必要な弁証法的アプローチ

「新たな文化を別の文化に移入することは、とても困難を伴うことで、それぞれの文化的背景をよく理解する必要があります。『ファシリテーション』についても、日本と欧州の文化の違いについて考える必要があります」

日本における芸術へのアプローチには、調和や均衡を求める儒教的、仏教的な考え方が背景にある。一方、全ての西洋芸術の基礎となっているのは、ギリシャ時代以来のソクラテスの弁証法式（対立する2つの見解から思考を展開し、解決を求める手法、ソナタ形式）である。日本でのワークショップに求められるのは、その弁証法的な方法論によるdiscourse＝分析的対話だとスペンサー氏は主張する。それは、異なる2つの文化を、それぞれの背景を理解し、見解の一致を求めていく作業にほかならないからである。

創造的に社会を生きていくための技術

「テクノロジーの発達によって子どもたちの学習方法が劇的に変化しています。この急激に変化は、私たちが有効だと思う教え方が、3、4年後には有効ではなくなっている可能性があるということでもあります。ですから、子どもたちに教えるべきなのは、多様な文化に適応していくために、柔軟で、創造的に社会を生きていくための技術なのです」

作家であり教育学者でもあるGetty財団上級顧問のケン・ロビンソン卿が「芸術の技法や技術というのは、人間の創造力を解放し、時に全身全霊で何かに取り組むことを可能にする、非常に効果的な手段である」と言うように、数々の調査結果が教育における芸術の効果を証明している。さらにスペンサー氏は、オフロードを走るために作られた四輪駆動車を比喻として、こう説明する。

「その四輪駆動車で近所に買い物をするのでは意味がなく、本来の性能を引き出すような大自然の中を走るべきだし、ドライバーにも運転技術や専門知識が必要です。つまりワークショップとは、個人の潜在能力を引き出すような学習活動であり、ファシリテーターは、個人の潜在能力を最大限に引き出す、効果的な環境を作り出す人だと、私は考えています」

異なる見解の間で、弁証法的に対話を進めながら解決を模索すること、「出る杭は打たれる」のではなく「出る杭を奨励する」。それを他者のために、より良い知識へと役立つようにすることが、ファシリテーターに求められるのである。

最後に、冒頭に紹介した「自分の考えを活かす勇気を持つこと」という言葉を改めて振り返り、スペンサー氏による基調講演は締め括られた。



写真左:仲道郁代氏、右:仲道氏によるプレゼンテーション

3. 基調講演Ⅱ

音楽家と社会の関わり方

——“私弾く人、あなた聴く人”以外の、可能性

仲道郁代(ピアニスト)

ピアニストの仲道郁代氏による基調講演は、プロジェクターを使用したプレゼンテーションとピアノの演奏を入れ替わりながらの進行だった。最初に、仲道氏がワークショップを学びたいと考え始めたのか、その経緯について話があった。演劇、絵本、スライド、朗読など様々なジャンルとのコラボレーションや、2011 年の東日本大震災以降は被災地での演奏活動にも取り組んできた仲道氏には、常に抱いていた感情があった。

「本当に音楽の力が、隅々まで伝わっているのだろうか、もっと何かできないのか、という思いを常に抱いてきました。ですが、音楽というのは曖昧なもので、いろんな方が、いろんな思いで音楽に向き合っているわけです」

その音楽の曖昧さは、社会における音楽の必要性について誰もが提示できないという悩みにもつながっていた。それが、ワークショップを学びたいと仲道氏が考えた動機だった。

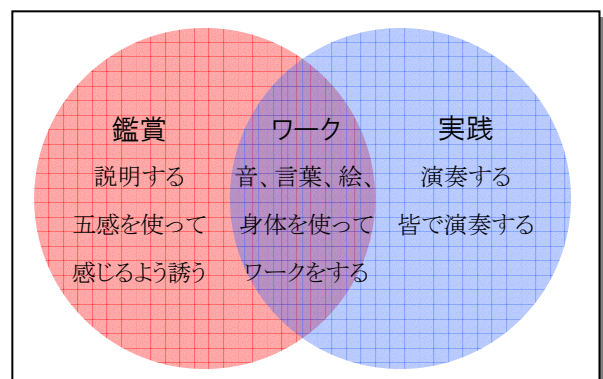
「鑑賞」と「実践」の間にあるもの

従来、音楽では「鑑賞」と「実践」という2つの領域で議論がされてきたが、その中間の「ワーク」という行為の可能性について、仲道氏は考えてきた。

例えば、鑑賞者に提供する知識を取り上げた場合、作曲家に関する音楽史や音楽学的な知識を提供する場合と、音楽を聴く人が思い描くイメージを自由に喚起させる場合では、音楽の聴き方が変

わり、イメージを言語化する力を引き出すこと(例: ショパンの練習曲「エオリアン・ハープ」を聴いて、朝、昼、夜、どの情景を思い浮かべるか、という問い掛け)や、より密接に音楽と関わる方法として、言語化したイメージを、音で表現する(例: ショパンの「エオリアン・ハープ」で朝の情景を思い浮かべた人がグループになって、その分散和音を使って作曲する)といったワーク(作業)も考えられる。

そのような、音楽の力を引き出す作業を円滑に進めるために必要な技術を持つ人材がファシリテーターであり、「鑑賞」と「実践」の間に、そうしたワークの可能性があると仲道氏は考えている。



たとえ楽器の演奏ができない人でも、手を叩く、声を出すといった音を使うことで音楽の実践は可能になり、その行為を他者と共有することで自分の感受性の幅を広げることができるのである。

音楽によるワークショップを行うことによって、①想像力、②創造力、③表現力、④コミュニケーション力、以上の4つの力がもたらされると仲道氏は考える。また、ワークショップに参加する者は全員が対等な立場であり、ファシリテーターは個々人の意見を引き出し、決して人の意見を否定しないことが求められると言う。

そうした作業をするプロセスの中に大きな意義が

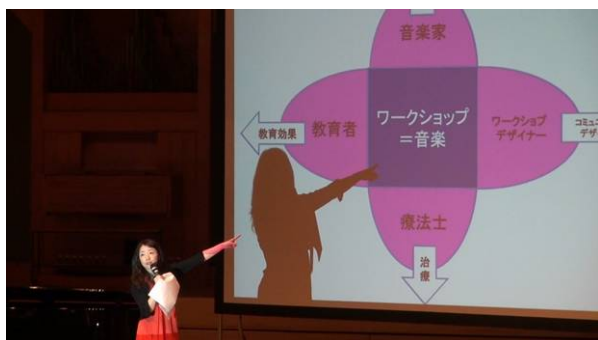


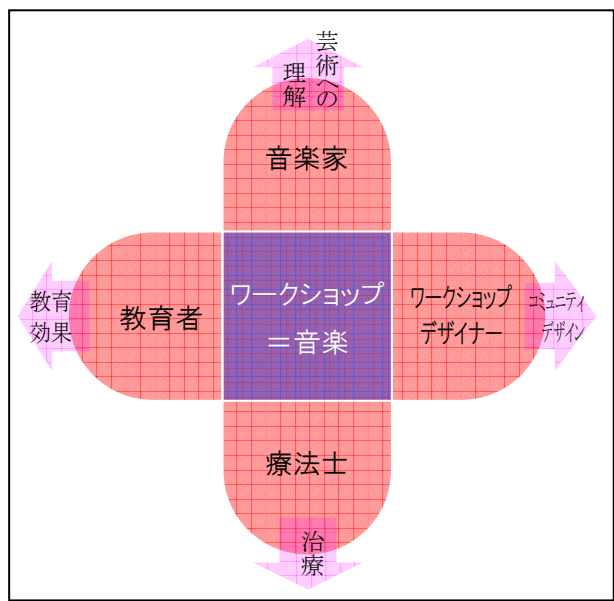
写真: 仲道氏によるプレゼンテーション

あり、同時に、作品への理解が深めることができるのである(例: ベートーヴェンの交響曲第 5 番の第 1 楽章の第 1 主題の 4 つの音を使った作曲)。

何のためのワークショップなのか

「ワークショップというものを、聴衆を拡大するためにしているのか、という問いに対して、私たちの答えはもちろん“yes”です。けれども同時に、“not only”(それだけじゃない)とも言えます」

音楽のワークショップは、様々な領域で効果を生み出している。教育者は音楽を通じて様々な教科の教えに活かすことができ、療法士は身体訓練や心の癒しなどに音楽を活用することができる。すでに演劇や美術を使ったワークショップで行われているように、音楽もコミュニケーション能力を高め地域の人々をつなげることに力を発揮できる。



また音楽のワークショップを核として、音楽家と療法士、音楽家と教育者、ワークショップデザイナーと療法士など、様々な連携やコラボレーションによる波及効果を生むことが考えられる。そこに携わ

る人や参加者が増えれば、最終的には音楽の聴衆を拡大することにつながるのではないか。そこに仲道氏は大きな可能性を感じている。

「音楽のもつ力」と「音を使つてのワーク」

次の仲道氏は「音楽のもつ力と、音を使つてのワークは、同時に存在し得るか」という問題提起をした。「音」は人類が言葉を持つ以前から動物や人間の感情の表現手段として使われてきたものであり、「音」そのものを使ったワークショップを成立させることも、可能である。

しかし「音楽」には「理論」がある(ベートーヴェンのソナタ「月光」の音程やリズムの象徴的な意味、ショパンの即興曲の主題の楽章間の変化を例示)。その理論は「音」そのものが持つものではないため、「音楽のもつ力」は「音を使つてのワーク」に納めてしまうことはできない。

その一方で、クラシック音楽は専門的な理論について知識を持ち合わせていないと難しいとの批判的な見方もある。そのためにも、専門的な理論を一般的な知識に噛み砕く役割としてファシリテーターが存在しており、ファシリテーターには、音楽を理解し、解釈し、表現方法の多様性を網羅したうえで、ワークショップを構成する力が必要だと仲道氏は考える。

「なぜ音楽が素晴らしいのか。誤解を恐れずに言えば、音という空気の振動から、人間が何かを感じるということを、学術的に積み重ねられてきた理論がある。だからこそ、素晴らしいと思うのです」

その理論を噛み砕いて、多くの人が実感・体感できるワークショップというプロセスがあることによって、音楽が持つ力を人々が享受できると仲道氏は主張する。



写真:ピアノを弾きながら「音楽のもつ力」について語る仲道氏

音楽は、より良い社会をつくることができる

音楽のワークショップは、心に直接的に作用するからこそ、癒しや勇気や元気をもらうことができる。言葉にならないことを理解し、感謝し、喜びを感じることができる。そうしたことは私たちの生活の中でとても大切なことである。もし、理解を越えたものに対して畏敬や感謝の念を持ち得なければ、人々は狭量な考えを持つようになり、争いが絶えない社会になるだろう。

「大きな意味ではなくて、実際に音楽によって、より良い社会をつくることができると私は信じています。今までのあり方からもう一歩、方法を進めて、音楽の力が密接に社会に関わっていく方法を一緒に考えませんか」

会場にいる参加者全員に伝わるように、優しく丁寧な、一言ひとことを選びながら語りかけながら、仲道氏の基調講演は締め括られた。



写真左:伊波睦氏／右:田村孝子氏

4. パネルディスカッション「日本におけるファシリテーターの未来像」

パネリスト	伊波 睦	日本フィルハーモニー交響楽団 トロンボーン奏者
	田村 孝子	文化ジャーナリスト／静岡県コンベンションアーツセンター グランシップ館長
	吉野 さつき	ワークショップ・コーディネーター／愛知大学准教授
	吉本 光宏	ニッセイ基礎研究所 主席研究員・芸術文化プロジェクト室長
モデレーター	箕口 一美	サントリーホール プログラミング・ディレクター

スペンサー氏と仲道氏の基調講演に続いて行われたパネルディスカッションでは、「日本におけるファシリテーターの未来像」と題し、様々な立場や見地からの活動紹介や意見交換が行われた。ここでは、各パネリストの発言概要と論議の要旨を記すものとする。

パネリストの活動とファシリテーターへの眼差し

箕口: 本日の参加者の皆さまは、既にワークショップの現場に何らかの形で関わっていらっしゃる。より高いレベルに進むために、パネリストの方々の経験を蒸留し、共有できればと思います。

伊波: 普段、オーケストラでトロンボーンを吹いています。マイク(マイケル・スペンサー)さんと一緒にワークショップをするようになったのは、かつて日本フィルの事務局長を務めた出口修平さんが研修で行ったロンドン交響楽団を見て、ぜひ日本でもやりたいと考えたことがきっかけでした。出口さんの指導で2000年に横浜の小学校で実践体験をしたが、子どもの感性の豊かさに気づくと同時に、実は「このくらいのことなら自分でもできる」と考えていたんです。

その後、マイクさんのワークショップが横浜のみなどみらいホールで行われた現場を見て、まった

く違う方法やファシリテーションの技術の高さに驚きました。それから、マイクさんの手法に共感を持って一緒に仕事をしています。

マイクさんのワークショップの種明かしを少ししますと、マイクさんは視線を交わす、イメージを伝える、音に合わせて体を動かすなど、子ども達に言葉で説明しすぎない。それにも関わらず、子ども達は正確に音楽の構成要素を理解し、楽しむことができ、専門家である私自身も、目から鱗が落ちるような体験をすることがあるんです。

田村: 公立文化施設の館長をしております、日頃公立文化施設が「何のため」「誰のため」に存在するのかを考えるようにしています。6月に「劇場、音楽堂等の活性化に関する法律」が成立しました。その第三条「劇場、音楽堂等の事業」にも「実演芸術に関する普及啓発を行うこと」が含まれています。

現在、公的な助成を申請する場合でも、アウトリーチやワークショップが求められる場合が多く、助成を受けるための「手段」になっている傾向があり、残念に思うことがあります。ワークショップの質は大切です。最初にマイクさんに取材した時「ワークショップが玉石混交なのは、英国でも同じですよ」と言われたことが印象に残っています。



写真左：吉野さつき氏／右：吉野氏、田村氏、井波氏

グランシップでは、毎年夏に「グランシップ音楽の広場」を開催しています。オーケストラや合唱団、ダンサーなど総勢 700 人以上が出演する音楽会です。ただ指揮者、コンサートマスター、セクションのトップなどは一流のプロの音楽家ですが、大部分はアマチュアですから、偉大なるワークショップでもあると思っています。子どもにも大人にもグランシップの職員にも、音楽に触れ感動する場、一生懸命取り組む機会を提供しているのです。

更に、特に職員には、この音楽会に限らずワークショップを行う専門家である優れたファシリテーターと出会うチャンスをできるだけ多くと思っています。芸術に関わる者として、芸術の社会的役割が何であるのか、どうすればその役割を担えるのか常に考えなくてはなりません。公立文化施設の役割は「芸術の力を活用し、生きる力を育む」ための施設であると考えています。ですから、ワークショップは、音楽以外でも、演劇、ダンス、美術、など様々な分野で試みられるべきです。ただ先ほども申し上げましたが、ワークショップを行うファシリテーターなど関係者にきちんとした理念があること、その質は問われると思っています。

吉野：ワークショップ・コーディネーターという仕事をしています。英国の障がい者による劇団のジェニー・シーレイという演出家が日本で行った演劇のワークショップの映像を見てください。彼女は耳が聞こえないので、手話でコミュニケーションをしますが、英国と日本では手話も異なります。そのためこのワークショップでは、英語、日本語、英語の手話、日本語の手話という4種類

のコミュニケーションが行き交っていました。

マイクさんから話があったように、ワークショップには様々な人との関わりの中で、様々な可能性が生まれます。先ほどの田村さんから紹介があった大規模なコンサートとは対照的で、私の現場の多くは少人数での演劇ワークショップでの実践をしています。

ワークショップでの西洋と東洋の違いについて、マイクさんの見方にあったように、ジェニーさんのワークショップでは、様々な障がいを持つ人がいたために、明確に一人ひとりの個の違いがあることから出発しています。そのため、西洋的な考え方がワークショップの前提になっていました。

一方、西洋とは対照的な東洋的なワークショップのあり方という意味で、日本の作曲家の野村誠さんが特別養護老人ホームで実践しているワークショップの映像を紹介します。ここでの参加者である老人たちは、施設で一つの共同体を形成していて、その共同体の構成は入れ替わっていきます。翌月そこに訪れると、先月参加していた老人がお亡くなりになっているということもあるんです。つまり、ワークショップで個々人が技術を蓄積することには、あまり意味がないと言えます。ジェニーさんと野村さんのワークショップを比較して、対称的である部分に気が付きます。というのも、ワークショップの進行面で、ジェニーさんは構成的・構築的に、野村さんは非構成的・脱構築的に行っていることです。

一方で、両者に共通しているところもあります。一つは、どちらの参加者も身体的・精神的な状態を予測することが難しく、それに柔軟に対応しなければならないこと。もう一つは、どちらのアー



写真左: 吉本光宏氏、右: 箕ロー美氏



ティストも何かを「教えよう」と思っているのではなく、その場の参加者と「何ができるか、何を創ることができるか」を実践していることです。そうした点に気を配ることが大事です。

吉本: 私からは、音楽のワークショップが日本でスムーズに浸透していかない理由の一つとして考えていることをお話したいと思います。それは、ファシリテーターが活躍できる基盤が日本では整っていないのではないか、ということです。

海外では、芸術と教育との出会いの機会は多様な形で益々広がっています。英国では、2002年にCreative Partnershipsというプログラムが始まりました。アーティストやクリエイターを学校に派遣し、子ども達の創造性を養う。それは英国の創造的な産業の成長につながるものとして、国家戦略に位置づけられました。その成果として、プログラムを実践した学校の9割程度の校長が、子ども達の自信、コミュニケーション能力、学習意欲の向上等に貢献したと評価しています。プログラムに参加した生徒は、参加していない生徒よりも、英語、数学、理科などの基礎教科の平均点が高くなったという調査結果も公表されている。

米国では、2008年の大統領選挙でバラク・オバマ氏が文化政策に関するマニフェストを発表し、その冒頭で芸術教育に対する投資を謳っています。また、ニューヨーク市では2007年に「アート教育のためのブループリント(学習指導要領のようなもの)」を策定し、従来の音楽と美術に加えて、演劇、ダンス、映像の5教科の指導要領を作成しています。カーネギーホールでも教育普及事業に積極的に取り組んでおり、教育部門のみの

年間予算で約6億円という規模です。カーネギーホールの教育部門のディレクターは「21世紀において身につけるべき能力は、創造力、想像力、協調性、チームワークであり、こうした能力を伸ばすためにはアートや音楽が非常に適している」と語っています。

日本でも、文化庁が「次代を担う子どもの文化芸術体験事業」を実施していますが、そこでは「将来の芸術家の育成や国民の芸術鑑賞能力の向上につなげる」ことを目的としており、英国や米国とは方向性が大きく異なっています。鑑賞事業も重要な役割を果たしていることは間違いありませんが、私は、文部科学省が行っている「芸術表現を通じたコミュニケーション教育の推進」事業を注目しています。それは「芸術を愛する心を育て、豊かな情操を養うとともに、コミュニケーション能力の育成を図る」ことを目的としたものです。その他にも、財団法人地域創造や、各地の地方公共団体、公立文化施設、アートNPOと民間企業との協働など、多様な実践が見られます。お隣の韓国でも、芸術と教育との出会いには国を挙げた様々な取り組みが行われています。

Korea Arts and Culture Education Service (KACES)という専門機関の設立や芸術教育支援法の成立、そして学校や福祉施設での取り組みなど、相当な予算を投入して推進しています。私は、こうしたアート教育の効果は、①自信の回復、自己肯定感 ②創造力、想像力、批評的思考力 ③社会性、協働作業、グループワーク、責任感など ④基礎学力の向上(他教科との連携)、の4つに整理できるのではないかと考えています。ここで興味深い数字を紹介します。経団連が

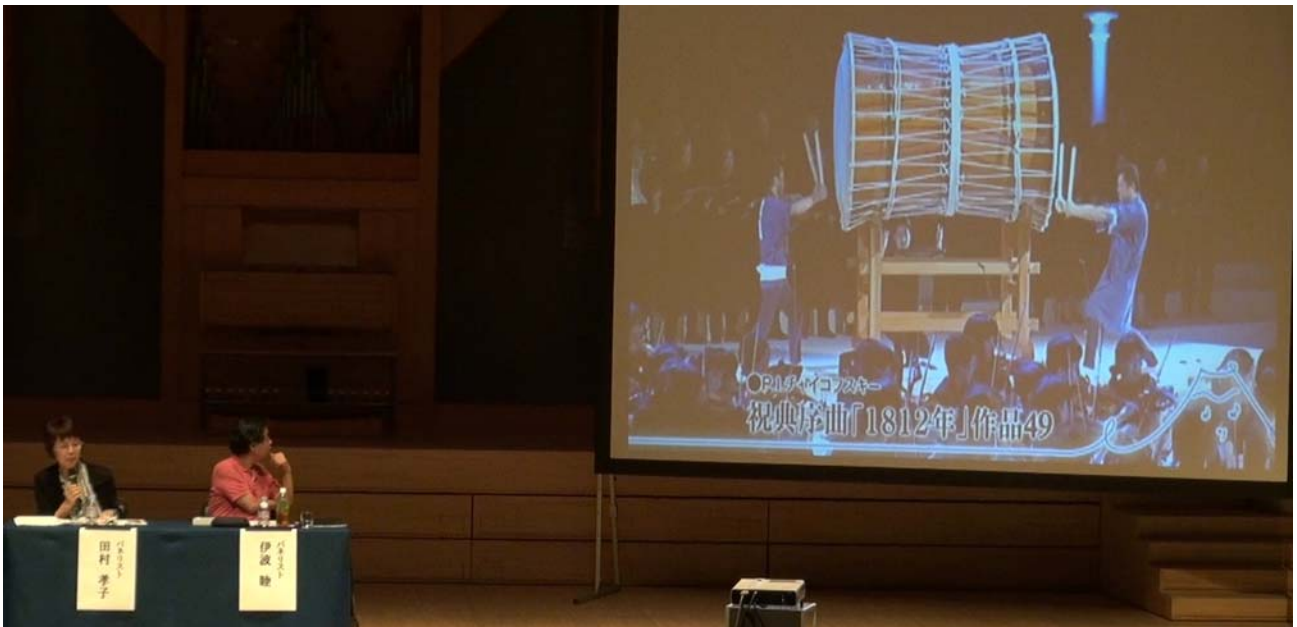


写真:田村氏の紹介による静岡県コンベンションアーツセンター「グランシップ音楽の広場」の映像

2011 年に調査・発表した日本企業が「選考時に重視する要素」で、上位3つが、コミュニケーション能力(80.2%)、主体性(62.1%)、協調性(55.0%)となっています。つまり、日本企業が求めている人材に、芸術教育は最も有効だということが、データからお分かりいただけると思います。ぜひとも、ファシリテーターの活躍のできるプラットフォームのような環境を作ってほしいと考えています。

音楽ワークショップにおけるファシリテーターの役割

箕口:パネリスト 4 名の方々から、ワークショップの現場を巡る様々な切り口をご紹介いただきました。本日のテーマは「ファシリテーターの未来像」ということだが、「ファシリテーター」と「コーディネーター」という言葉の違いが、伝わりにくいかもしれません。

吉野:「ファシリテーター」は、facilitate、つまり「促す」とか「促進する」という意味から来た言葉で、学校や福祉施設といった現場において、その場の流れや動きを促し、進行させていく立場だと言えます。「コーディネーター」は、ワークショップの参加者、ファシリテーター、アーティスト、プログラムを主催する立場の人たちの間を coordinate する、つまり、調整したり繋いだりする役割だと思っています。いただければいいのではないのでしょうか。

箕口:伊波さんが現場でやっていらっしゃるの、まさに「ファシリテーター」だと言えます。伊波さんご自身が考える「ファシリテーター」とは何ですか？

伊波:正直なところ、まだよく分からないんです。マイクさんのワークショップは、音楽ではあるものの、演劇のワークショップの手法に近いと思います。英国に行って、マイクさん以外の人がやっている音楽ワークショップは、あまり面白いと思わなかったのです。

ファシリテーターとして、マイクさんに教わったことは「スコア(総譜・楽譜)を読みなさい。スコアから、何を子どもに伝えるべきかを読み取りなさい」ということです。相当、楽曲を分析して、よく分かっていないことには、シンプルに伝えることができません。

ベートーヴェンの交響曲第5番の第1楽章の第1主題の「タタタターン」という4つの音のリズムが、どのように楽曲の要素となっているのかを子ども達に理解させることは、簡単なことではありません。それでもマイクさんの手にかかる、子ども達は楽しく理解するんです。いつもマイクさんは「あなたが伝えたいことを、伝えなさい」と言うのですが、それがファシリテーターの仕事ではないかと、感じています。

箕口:ファシリテーターというのは創造性が必要な、何かを「創り上げていく」現場にいる人材だと言えますね。

伊波:創造力というのは、子どもが遊びの中で本来持っているもので、マイクさんにも、子どものような遊びの資質が見られます。「なんだ、そんなことか」と思うこともあるけれども、大人では気がつかないことでもあります。

ファシリテーターの人材育成と職業としての現場

箕口:ファシリテーターを取り巻く環境で、人材の養成という点も大きな課題ではないでしょうか。

吉野:私は現在、大阪大学、青山学院大学、鳥取大学が共同で推進している「ワークショップデザイナー育成プログラム」の計画から携わっていて、その修了生に活動の場を提供し、人材の力を育てるための「ワークショップデザイナー推進機構」の理事長を務めています。ファシリテーターやワークショップを学術的にも位置づけて、知識や技術、現場での体験を振り返る場が生まれて4年目になり、修了生は400人を数えます。アーティストだけでなく、教員、福祉や医療関係者、公務員、企業の人事部門の方など、様々な職業の方が受講されています。養成の中では、専門分野の知識や技術を手法として構築し伝えていくことも大事ですが、異分野の領域とどのように関わるのかも重要だと感じています。例えば音楽と演劇、芸術と医療、行政と企業など、異分野間で学びあうことが大事な要素だと思います。

吉本:私も人材育成は重要な課題だと考えています。ファシリテーターの養成には、アーティストが

もっと現場を経験していく必要がある。一方のコーディネーターは、例えば、学校で音楽のワークショップを行うことが子ども達にどのような効果があるのかを説明できなければなりません。

ファシリテーターもコーディネーターも、そうした能力を持つ人材を育てるだけでなく、職業として成立させていくための環境がなくては育てる意味がありません。

先ほど紹介した文部科学省の「芸術表現を通じたコミュニケーション教育の推進」では、助成対象経費としてファシリテーターやコーディネーターに報酬を与えることができるようになりました。これは画期的な制度変更だと思います。ファシリテーターやコーディネーターの仕事は、なかなかそこが理解してもらいにくい状況ですが、人材を育てると同時に、仕事の現場を増やすことが必要だと思います。

箕口:先ほど Creative Partnership の紹介があった英国では、Creative Partnership の現場で必要となる人材をギルドホール音楽院が育てていました。音楽家としてのモチベーションの高い人材が、ファシリテーターとして活動していることに感銘を受けたことを思い出しました。

田村:ホールや美術館を含めて、公立文化施設には、教育プログラムの専門職員を配置すべきだと思っています。ベルギー王立モネ劇場というオペラハウスで教育プログラムのディレクター、リンダさんに話を伺ったとき、「私はたまたまモネ劇場にいるからオペラを素材に教育プログラムを考えているが、子ども達に生きる力を育むために、こうした仕事をやっているのです。私たちに必要なのは、芸術、教育、心理学の専門家であり、哲



写真左より:箕口氏、吉本氏、吉野氏、田村氏、井波氏

学を持っていることです」と仰っていました。音楽の一分野について知っているだけでなく、広い視野でワークショップという仕事に携わらなくてはならないと思いました。

箕口:会場でお聞きになっている仲道さんに、専門教育機関である音楽大学が、ファシリテーターの問題にどのように関わることができるか、ぜひご意見を伺いたいのですが。

仲道:私自身は音楽家なので、音楽の力をどのように活かすことができるのかを考えています。音楽家とは、音楽家としての技術だけでなく、それまでに生きてきた人間としての在り様のすべてが、音楽に表れるものです。ということは、音楽大学のあり方も、人間としての「幅をつくる」ということ、それが社会に出たときに、より幅広く活躍できる可能性を高めることになるのではないのでしょうか。そこを踏まえた音楽大学での教育のあり方が、広がっていくと良いのではないかと思います。

日本におけるファシリテーターの未来像

伊波:10 年ほど前に、米国のイーストマン音楽学校とボルティモア交響楽団による地域コミュニティに対する取組について話を伺ったことがあります。名門校であるイーストマン音楽学校がアウトリーチの専門家を育成しようとしていることに感心しました。ただ、当時はそうした教育を受けて卒業しても、職業として専門家になれる確率は高くはなかったはずです。それでもイーストマン音楽学校のような信用の高い学校が育成することで、就業の機会は大幅に増えたと聞いています。そうした人材が社会に増えていけば、将来は、

例えば「トロンボーンだけ吹いていても通用しない」という状況も生まれるのかもしれませんが。

田村:劇場、音楽堂等の活性化に関する法律が成立し、そこには専門家がいることが求められています。その一つの役割として、教育プログラムが位置づけられ、未来像としては、ファシリテーターの働く場は増えるとともに、質が問われていくことになるでしょう。今後、ますます優れた人材が各地で求められるようになるのではないのでしょうか。

吉野:ワークショップの様々なプログラムを考えて現場に臨むことも大事ですが、現場では参加者に応じて柔軟に変えていくことも大事だと思います。なぜ大事かと言うと、ワークショップはコミュニケーションをデザインするものですが、アーティストと参加者とのコミュニケーションが主軸ではなく、アーティストが媒介となって、参加者同士のコミュニケーションが促されることが主軸なんです。そう考えると、主役はアーティストではないはずです。その観点で現場を見ると、より良いワークショップが実現できるのではないのでしょうか。

吉本:今日、上野学園でこのようなフォーラムが行われたのは、大きな意味のあることで、ぜひ、ファシリテーターのプラットフォームを作る努力を続けていただきたいと思います。ワークショップの現場を見れば、どれほど素晴らしいことが起きているかは分かっただけです。それをどのように広げていくか、今日の参加者一人ひとりが考えていく以外にありません。そうした動きから、必ず、日本にも素晴らしいファシリテーターが数多く生まれてくるはずだと信じています。

5. マイケル・スペンサーによるワークショップ

進行: マイケル・スペンサー (ファシリテーター／上野学園大学音楽文化研究センター客員研究員)

午前中の基調講演とパネルディスカッションのあと、昼食休憩を挟んで、マイケル・スペンサー氏によるワークショップを参加者全員で行った。以下、写真の記録を中心に進行内容を記す。



ワークショップはリラックスした雰囲気スタート。「まずは歌ってみましょう」とマイクさん。参加者を立たせて、何の説明もなく、どこの国の言語なのか分からない歌詞の、陽気なメロディーの歌を歌い始めたマイクさん。彼に合わせて、自然と参加者も歌い始める。



マイクさん「いまの歌は、どのような構造でできていると思いますか？」参加者の数人がマイクさんに答える。
マイクさん「そうですね。A、B、C のパートからできていて、またAに戻ってくるというシンプルな構造です」。



再び、同じ歌を全員で歌い始める。マイクさんは歌わずに、2つのグループ輪唱が発生するように身振りで指示。歌っているうちに、見事なハーモニーが生まれた。「すごく簡単な歌ですが、これはアフリカのコンゴの歌なんです」。



二人組みになってお互いの手首の脈のリズムを確かめ合う。「人間として生まれついた皆さんは、体の中にいつも音楽があるんです」とマイクさん。「だから、皆さんが思っているよりもずっと昔の感覚を音楽で思い出せるんですよ」。



次は、簡単な手拍子の掛け合い。最初はシンプルなリズムを全員で繰り返したあと、2つのグループに分けて、1つのグループは繰り返す前に1拍「ヘイ！」とあいの手を入れる。すると、2つのグループのリズムは徐々にズレていく。



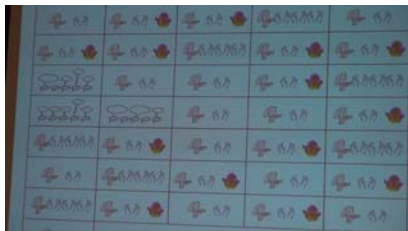
「では、別のリズムをやってみましょう」と、スクリーンに手と足のイラストが表示される。足の絵は足ふみ、手の絵は拍手。さらに「ブーヤー」「ラーラララ」などの文字が表示されると、その通りに声を出すというルールが提示される。



3つのチームに分けられ、ルールに基づく指示が書かれた数十枚の紙のセットが各チームに渡される。「10分で、すべての紙を使って面白いリズムの曲を作ってください。10分後に発表です！」3つのチームは、早速ホールの舞台、舞台袖、ホワイエに分かれて相談と練習を開始。



各チームで、紙の並べ方、メンバーの配置、演奏のテンポなどが違う。紙を縦横に並べてメンバーが取り囲むチーム、メンバーと紙を円形に配置するチーム、曲のテンポを徐々に速めるチーム。10分が経過し、再び舞台上に全員が集合してリズム作品を発表。



マイクさんが言うには、各チームが演奏したリズムは、実はある曲の断片だとのこと。「本当の曲は、こういう順番で演奏します。これは何の曲だと思いますか？」…スピーカーから流れてきたのは、ストラヴィンスキーの「春の祭典」。参加者一同、ハッとした表情を見せる。



「21世紀を代表する皆さんご存知の名曲ですが、このようにシンプルな要素でできています。この曲は子どもには難しすぎる、という意見もありますが…」とワークショップの映像を見せるマイクさん。映像の中の子も達は、いま参加者である大人たちが実践した同じことを楽しそうにやっている。



「この子たちは、周囲の大人たちが教えたり手伝ったりすることなく、自分たちの力で、いま皆さんがやったことができたんです。ここからも分かるように、子ども達には難しそうに見えることも、あるルールを作ることで、自分たちの力で理解できるようになるのです」。

わずか 45 分間のワークショップだったものの、参加者は、楽しく歌い、手拍子に夢中になり、音楽の構造を体で理解した。また、今まで何度も聴いたことのある音楽に驚き、新たな発見をした。その一瞬一瞬に見せた表情が、まるで子どものように輝いていた。

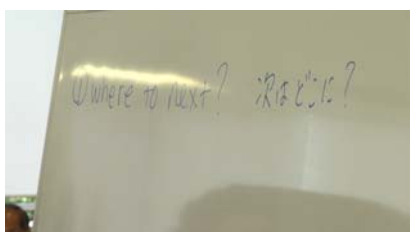
6. グループワーク「ファシリテーターの可能性、その先にあるもの——芸術と社会の関わり方」

進行:マイケル・スペンサー(ファシリテーター／上野学園大学音楽文化研究センター客員研究員)

ホールでのワークショップのあと、大学の学生食堂に場所を移動して、「ファシリテーターの可能性、その先にあるもの」をテーマにしたグループワークを行った。以下、写真の記録を中心に進行内容を記す。



「これから2つの質問をします。それについて、7つのグループで話し合ってください」とマイクさん。そしてブレインストーミングに役立つ「6つの帽子」の紙のセットが各グループに配られる。他者に意見に対する自分の意思表示(疑問、賛同、新しいアイデア等)を表明しやすくすることに使う。



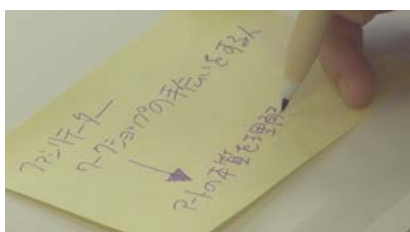
最初の質問は「Where to next?」。ファシリテーターの可能性を広げるために、私たちは次にどの方向を目指すのか。理想的な環境とはどういう環境なのか。それに対する回答や課題についてグループごとに議論しながら、思いついたことを付箋紙に書いて模造紙に貼る。



各グループでの自己紹介から始まり、マイクさんから投げかけられた質問について議論の輪が広がる。グループには、多様な立場、多様な経験を持つ人たちが混在している。



付箋紙に書かれた意見の内容を、同じ方向性のものを近い位置に貼って整理する。その整理の過程で、新たな意見や別の見方が発生し、議論が展開されていく。



次の質問は、マイクさんが基調講演で最初に話したことを振り返る「What's Facilitator?」。基調講演、パネルディスカッション、ワークショップ、そして今の議論で、参加者の中のファシリテーターの意味は変化したのだろうか。この質問について、まずは各自が答えを付箋紙に書く。



参加者全員が立ち上がり、テーブルの周囲を歩きながらこれまでに書いた付箋紙が貼られた各グループの模造紙を眺めて他の参加者の意見に目を通す。すれ違う人同士で、また小さな意見の交換が発生する。



再び各グループのテーブルに戻り、これまで話し合ったことの最も大事だと思う3つのポイントについて意見を集約する。そして、今日のフォーラムで、ファシリテーターに対する考え方に変化があったかどうかについて、意見交換する。



各グループの意見を順番に発表。それぞれのグループで優先順位は異なるものの、大事だと思うポイントには、ファシリテーターの認知、人材育成、資金調達、情報共有などが挙がる。



また、ファシリテーターに対する考え方に変化があったかどうかについては、変化していないという参加者が多かったものの、その言葉の節々には、以前よりも理解が深まったような印象を受けた。



ファシリテーターの人材育成の問題については仲道郁代さんから、東京音楽大学、神戸女学院大学、昭和音楽大学の3大学共同で「音楽コミュニケーション・リーダー」の取組が紹介された。「今日の参加者で、こうした人材が働く現場を増やすために、お互いが協力できれば」と仲道さん。



「とてもおもしろい一日でしたね」とマイクさん。「このように、多様な背景を持つ大勢の人が、一堂に会するということが重要だと思います。また、今の時代はネットワークをつくることは技術的にも簡単ですから、ぜひ、今後とも皆さんでつながっていきましょう」。

フォーラムの最後は2時間半に及ぶグループディスカッションでは、初対面の参加者同士が率直に自分の意見を主張し、相手の意見を受け入れながら、ファシリテーターの可能性と将来像を語った。これらの対話を通じて、理想のファシリテーターを求める人たちの仲間意識を形成することができたのではないだろうか。

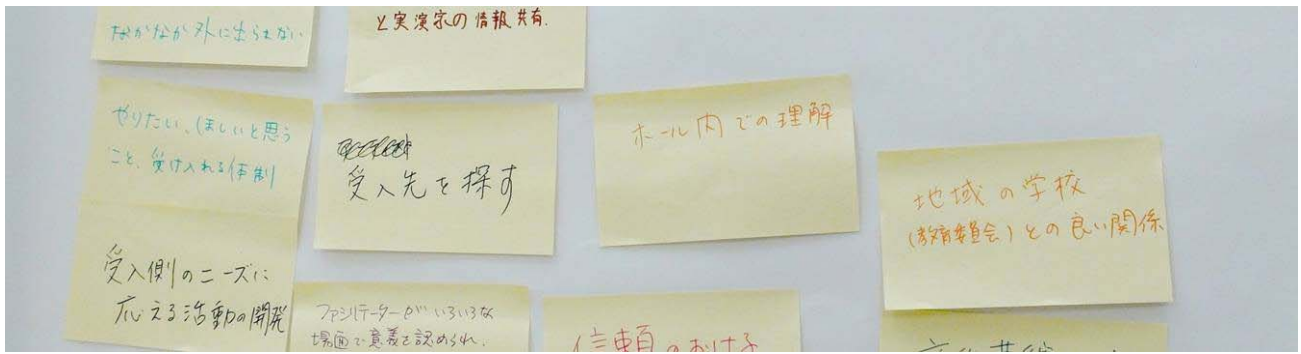


写真:「Where to next?」に対する回答が書かれた付箋紙

Ⅳ. グループワークにおける意見集約と考察 ～まとめに代えて～

およそ9時間に渡る本フォーラムのまとめに代えて、午後の後半に行われたグループワークにおける多様な意見を集約し、考察することとしたい。

グループワークでは、マイケル・スペンサー氏から、フォーラムでの様々な議論や体験を踏まえたうえで、「次に何をすべきか? (Where to next?)」と、基調講演の冒頭で参加者に提示された質問である「ファシリテーターとは何か? (What's "Facilitator"?)」の2つの問いについて、7つのグループ別に議論を行った。議論の結果はグループごとに発表されたが、ここでは、参加者各自が2つの問いに対して付箋紙に書いた回答を整理・分類し、考察を試みた。

各自の回答の分類については、定量的な分析を目的とした様式のあるアンケートではないために、必ずしも客観性が確保できているものではないが、ここでは全体的な回答の傾向を読み取ることを試みたものである。

次に何をすべきか?

「次に何をすべきか?」という問いに対して、7つのグループの模造紙に貼られた付箋は計 147 枚を数えた。各付箋紙に書かれた言葉から、問いに対する回答以外の意見やコメントを除いた上で、4つの大きな方向性と、より具体的な 13 の項目に分類した。

① 当事者間の努力、協力

- 情報共有、連携強化
- 概念の定義、認知、普及
- プログラム開発、手法研究

② 人材育成

- 専門人材の教育、育成
- 職能の確立、地位の向上
- 活動や人材の資質の評価
- 実演家の教育、育成

③ 理解者の拡大

- 文化施設の理解、協力
- 学校の理解、協力
- 行政の理解、協力
- 市民の理解、協力

④ 資金調達、収益性

- 予算獲得、資金調達
- ビジネス化、収益性

最も意見が多く見られた回答の方向性としては「①当事者間の努力、協力」に整理した。当事者間ができることの中でも、人材バンクやネットワークといったファシリテーター同士のつながりを形成する「情報共有、連携強化」に分類される回答が多い。また、市民にファシリテーターの定義や必要性を認知してもらうなど、「概念の定義、認知、普及」に触れる意見も多い。

次いで多く見られた方向性は、「②人材育成」である。プロフェッショナルなファシリテーターとなる人材を育て、訓練を積む場を望む「専門人材の教育、育成」に関する意見や、ファシリテーターを1つの職業として認知を広め、職業としての地位を確立させようとする「職能の確立、地位の向上」に整理できる回答も多い。

さらには「③理解者の拡大」に整理できる回答も多く見られる。とくに、文化施設の職員、学校の教員、文化行政の担当者に、ファシリテーターの理解



写真:グループごとに議論する参加者

者を増やすことや、良好な関係を作ることが重要だ
という意見が多かった。

回答の数は多くはないものの、「④資金調達、収益性」について触れている意見もある。文化予算の
拡充を訴えるものや、ビジネスとしての収益性の追
求が活動の持続に欠かせないという意見もあった。

こうして整理・分類したものを俯瞰すると、「次に
何をすべきか？」という問いに対する大きな方向性
としては、以下の4点に集約することができる。

- ① ファシリテーターの当事者間の情報共有や
連携を強化し、一般市民にも活動の重要
性を認知させていく努力を促す。
- ② より専門的な知識や経験を有する人材を育
成する。また、そうした人材の職能を確立
し、職業としての地位を向上させる。
- ③ 文化施設、学校、文化行政担当部課に、
音楽のワークショップやファシリテーターに
対する理解者を開拓し、良好な関係を形成
する。
- ④ 事業として音楽のワークショップに取り組む
ための資金調達のスキルや、事業化のビジ
ネスモデルを模索する。

全体的な意見の集約から、音楽のワークショップ
やファシリテーターが置かれている状況は、まだ発
展途上にあるとは言うものの、既に活動の萌芽や
先駆的な活動をリードする人材は存在していること
が見受けられる。「次に何をすべきか？」は、そうし
た現在の立ち位置において、社会から必要とされ
る優先順位と、現実的にアプローチが可能なことが
垣間見えている。

ファシリテーターとは何か？

スペンサー氏が基調講演の冒頭で参加者に提
示した「ファシリテーターとは何か？」という問いに
は、7つのグループの模造紙に計 58 枚の付箋が
貼られていた。それらの回答のうち、問いに対する
回答以外の意見やコメントを除いた上で、ファシリ
テーターが「何をする」人物なのか、その動詞に着
目して分類したところ、以下の8つの動詞を抽出す
ることができる。

- ① 引き出す
- ② 導く
- ③ つなぐ
- ④ 伝える
- ⑤ つくる
- ⑥ 支える
- ⑦ 育てる
- ⑧ 促す

英語の「facilitate」という動詞を辞書で引くと、
「楽にする、容易にする、手助けする、促進する」と
いった説明が記載されていることが多いが、本フォー
ラムでの様々な議論や経験を踏まえた参加者は、
辞書に記載されている意味だけではない役割に気
が付いたようだ。

最も多いのは、ワークショップの参加者の潜在能
力や可能性を「引き出す」という役割である。また、
「引き出す」ためには、個人のスキル(技術)だけで
なく、引き出しやすくするための環境を用意するこ
とも、ファシリテーターに必要なとする考え方も含ま
れている。また、「引き出す」と同じくらい多かった
回答に、理解や感動、新しい発見を「導く」という役
割も挙げられている。



写真:グループワークの様子

その他には、音楽と人、あるいは人と人を「つなぐ」、ワークショップに効果的な環境を「つくる」、楽しさを「伝える」といった回答と、「facilitate」の辞書的な意味に近い「支える」、「育てる」、「促す」といった文言も挙げられた。また、ファシリテーターとコーディネーターとの明確な違いや、区別の必要性が分からないという意見も見られた。

これらの回答の整理・分類から、本フォーラムの参加者全体の傾向として浮かび挙げるファシリテーター像を、以下のように集約することができる。

ワークショップの参加者の潜在能力や可能性を引き出し、理解や感動、新しい発見を導き出すための技術を持つ人材。あるいは、そうした環境を整える人材。

本フォーラムでは、必ずしもファシリテーターの定義を行うことが目的とするものではなく、「ファシリテーターとは何か？」に対する各自の自問自答に正解や不正解があるわけではない。むしろ、参加者の各自が、自分なりのファシリテーター像が具体化されて、その輪郭に手応えを持つことが重要だと考える。

以上、グループワークでの論議の振り返りから、本フォーラムが目指した「ファシリテーター」の役割とその重要性、そして未来像を探ることが、参加者各自や参加者相互の交流によって実現できた。

前述したとおり、参加者には「次に何をすべきか」が見えている。その実践に向けて自発的な行動を促すためにも、今回の参加者が再び顔を合わせて対話を深める機会が継続されていくことを願うものである。

フォーラム
日本におけるファシリテーターの未来像
——音楽のチカラ、ファシリテーターのチカラ——
実施レポート

2012 年 12 月

主催／発行： 上野学園 石橋メモリアルホール
上野学園大学音楽文化研究センター
〒110-8642 東京都台東区東上野 4-24-12
学校法人上野学園内
Tel: 03-3843-3043 Fax: 03-3843-6254
企画制作： 杉山幸代（石橋メモリアルホール マネージャー）
レポート作成： 大澤寅雄（株式会社ニッセイ基礎研究所
芸術文化プロジェクト室 | 准主任研究員）

※当レポートの文書、画像などを、無断で転載することを固くお断りします。